



慶應義塾創立150年記念事業

速水 融「苦しかった講義、楽しかった講義

——歴史人口学・勤勉革命・経済社会——」

(平成18年7月15日、三田517番教室)

1. 履歴

昭和4年10月東京で誕生

昭和25年9月：慶應義塾大学経済学部卒業

昭和25年10月—28年3月：日本常民文化研究所研究員

昭和28年4月—平成元年9月：慶應義塾大学経済学部教員

学部担当科目（担当年順）：（1）英書講読、（2）漁業史、（3）一般経済史、
（4）日本経済史、（5）研究会、（6）歴史
（大学院は省略）

平成元年10月—7年3月：国際日本文化研究センター（在京都市）教授

平成7年4月—17年3月：麗澤大学（在柏市）教授

海外留学：昭和38年2月—39年7月、ポルトガル・ベルギーに留学

昭和57年2月—7月、プリンストン大学訪問研究員

学位：昭和41年経済学博士、「近世初期の検地と家数人数改について」（出版準備中）

他大学への出講：早稲田大学、千葉大学、三重大学、香港大学

2. 各講義と自己評価

（1）英書講読．新米教員がまず持つ科目、テキストは自分では選べず、苦勞する。

自己採点＝－C

（2）漁業史．（昭和34年から）助教授になって持った初めての専門科目。日本常民文化研究所で漁村資料の調査をしていた関係から担当することになったと思う。前任者は羽原又吉講師で独特の講義スタイルを持っていた。一年間の講義の途中でタネが尽き、陸へ上る。のんきな時代。

自己採点＝C

（3）一般経済史．この科目は必修科目で、経済史関係の教員は全員が担当した。と



にかく、経済史に関する自分の枠組みが出来るまでは先人のものに依拠したり、参考文献に頼らざるを得ず、ノート造りに苦勞した。しかし、自分なりの枠組みが出来てくると、新しい世界が開け、それなりに「見えて」くる。ただ「一般経済史」の題名の著作を出す勇氣はない。

自己採点：C→-A

- (4) 日本経済史。 助教授1年目の6月、担当の野村兼太郎教授が急逝され、そのあとを引き継ぐことになり、甚だしい準備不足のまま始める。一年目・二年目は無我夢中で、準備のため一週間の経過が早かった。この頃研究テーマとしていた「検地」で時間を稼ぎ、共同研究をしていた「関東農村」で締めくくる形でともかく終えたが、講義を繰り返す内に、近代日本を準備した徳川日本という視点が出てきた。海外留学後は「一般経済史」、「日本経済史」とも自分の枠組みとでもいうべきものが出来てきたように思う。ただし、昭和45年頃までは、日本のなかでは少数派で、46年「数量経済史研究会」が発足し、日本における経済史研究がようやく国際通用力を持つようになった。筆者は、留学時に得た「歴史人口学」に拠り、それまでの日本の歴史学で、ほとんどなかった人口を取り上げ、以後これを研究分野としている。

「経済社会」、「勤勉革命」という用語も日本経済史の講義準備の過程で生まれた。「経済社会」とは、人間の持つ諸価値のなかで、経済的価値（最小費用で最大効用を得ようとする性向）が他から離れて自立し、経済法則が回転するようになる社会である。経験科学としての経済学も成立する。そこに住む人々の間にこのような行動の規範が一般化すれば、工業化も市場経済を通じて可能となり、そうでない場合は、計画経済—社会主義経済もその一つが選ばれる。このことを明示した著作は、最初（昭和40年代初め）通信教育過程のテキストとして、次いで学部講義のテキスト（文献①）として、最近では二・三の論文を加え新版を刊行した（文献②）。

一方、「勤勉革命」とは、経済社会の展開の過程で、生産量の増大を専ら労働力によって実現しようとする方向で、長時間労働、激しい労働、機械力を伴わない工夫などが相当する。日本の江戸時代は、まさにこの「勤勉革命」によって生産量が増大した。そこでは「勤勉」が道徳的に善とされ、それを引き継いだ戦前の教育では、神格化された二宮金次郎の像が、各公立小学校の校庭に建



てられていた。勤勉革命 (industrious revolution) という概念は、産業革命 (industrial revolution) に対置する概念として国際的にも使われるようになってきている。

このように、経済史への枠組みが出来てくると一反論はあるとしても一般経済史、日本経済史ともに講義は次第に苦痛ではなくなってきた。昭和40年代末の頃であろうか。もう一つ、昭和48年に、専門研究書(文献③)を出版したことも影響している。信州諏訪地方の「宗門改帳」を人口史料として、日本における歴史人口学を最初の著作となった。その過程で、国内・国外の学会で報告したが、むしろ国外での報告の方が反響が大きく、とくに昭和43年、アメリカ・インディアナ大学で開催された第四回国際経済史協会大会における報告は忘れられない。それは第一に、自分の国際学会における最初の報告であったこと、ひどくあがってしまい、手は震えるし、目を読んでいるペーパーから離すとどこへ戻っていか分らなくなるという始末だった。報告後の質問は何とか切り抜けたが、セッションが終わってから一人の紳士がやって来て「面白かった。まだ外に掲載が決まっていけないのなら、ぜひ自分の雑誌にほしい」といわれたのである。その人は Emmanuel Le Roy Ladurie 教授、フランス高等学術研究院に勤めるが、季刊誌 *Annales: Economie Société Civilisation* の編集者として著明な歴史家であった。Annales 学派という名称があるように、この雑誌に拠る者は新進気鋭のヨーロッパの研究者で、台頭してきたアメリカの数量経済史への対抗軸と考えられていた。その雑誌に自分の論文が載ることは大変名誉なことだし、正直嬉しかったから、直ちに OK した。

ところが、帰途会った英国ケンブリッジ大学 Cambridge Group for the History of Population and Social Structure の創立者の一人、Peter Laslett 氏にそのことを伝えると、お前は英語とフランス語とどちらが世界で多く読まれると思うのか、とやられ、なるほどそういう考え方もあるのだな、と思った。しかし Laslett 氏は翌昭和44年、英国 Cambridge で開かれた「家族と世帯の過去」国際会議に招待してくれ、そこでは何十人もの研究者を知ることができた。日本からは私の他、中根千枝さん一人であったが、中根さんは、現在日本学士院で、私の属する第一部の部長をされている。また、今年、フランスの Emmanuel Le Roy Ladurie 教授は日本学士院の客員会員に推挙されたし、英国



の Cambridge Group へは、逢瀬会員の一人、斎藤修君が長く滞在・研究し、高い評価を得ている。何か知らないところでネットが形成されている感がある。というわけで、この二つの科目への自己採点は尻上がりによくなったとしていいと思う。

自己採点：C→A

- (5) 研究会. 当初2年間は、旧野村ゼミも引継ぎ、この方の会もあるが、ここでは昭和34年に募集を始めた速水ゼミに限ることにする。ゼミは、講義が、とくに一般経済史や日本経済史のように合計千人を越すマス授業で、聴講者との距離が出来てしまう。それを補うのが研究会だが、それをうまく運営できた否かは一寸判断しかねる。ただ一つやってよかったかな、と思うのは「10週レポート」提出である。10冊以上の図書を決め、本がありませんでした、という言葉訳に備えて文庫を研究室内に設けた。入ゼミ試験をせずに全員入れ、最初の10週間内に毎週読書レポートを提出させ、提出しなかった者は、退会とみなすという制度である。ゼミの時間は、英書を読むことが多かった。そうすると、秋には大体適正規模になり、個別報告、共同研究が実施できた。共同研究のなかで、印象に残っているのは、明治初年の統計資料を用いた全国の「郡」・「区」（現在の「市」）別の経済指標の地図造りで、ちょうど研究室が一時的にキャンパス外のニッサン・ビルに出たので、場所もあり、時間に縛られず皆で地図塗りをやった。現在、その作業を本格化した歴史地図の刊行が予定されている。

しかし、研究会を統べる者としていえば、速水ゼミは *gemeinschaft* としては成功したかもしれないが、*gesellschaft* とはいえない。何しろ夏合宿のときなど、昼間勉強していて早く夜にならないかなどと考える者は、学生諸君に限らなかった。*gemeinschaft* と *gesellschaft* の融合である某室内競技に夢中になったのは、学生諸君以外にも居た。しかし、おかげで「逢瀬会」が出来（昭和53年）、国際学会の開催に際して資金繰りがつかず困惑していたとき合力してもらったことも出来た。このことを欧米の同輩に言うと仰天する。そこではゼミは *gesellschaft* だからである。というわけで、研究会の自己評価 = -B というところか。

- (6) 歴史. この科目は教養課程設置の科目であったが、担当者が国外留学のとき2



年ばかり担当した。「歴史」という科目名で何をやってもよかったので、大いに羽根を伸ばし楽しくやった。16・17世紀の日本をめぐる国際状況をテーマにしたが、その昔、このテーマの研究に海外留学に出た（結局失敗して「歴史人口学」を学んで帰ってきたのだが）こともあり、下地はあったから、あまり苦労はしなかった。学年末に「159x年、フェリペⅡ世、エリザベスⅠ世、豊臣秀吉の3人がリスボンでサミット会議を開いた、と仮定する。そこではアジアとヨーロッパ間の貿易、布教が主要議題となった。諸君はそこに派遣された記者として、報道を書け」という試験問題を出した。これは、教師生活50年を通じて、最も秀逸な問題と思っている。こういう問題でも出さないと、鋳型にはまったような、千枚を越える答案を読む苦痛と闘うことになる。自己評価=A。

自分の歩んできた学問を振り返ると、フランスの学問からの影響が大きい。とってフランスで学んだことはなく、読むことは読むが、フランス語は6回挫折したままである。しかし、Le Roy Ladurie との出会いも、多分彼が私の論文の中にあるアナル派との親近性を感じたのかもしれない。後になって分ったことだが、私が最も親しい国外の友人が、そのとき彼の秘書で私の英文論文をフランス語訳した由である。歴史人口学はフランス生まれで、私がそれを学んだのは国境から50キロしか離れていなかったとはいえ、数寄な運命であるが、フランダース語圏の隣国ベルギーであった。私の日本経済史の試験問題が、「百姓義平の一生を書け」という式のものが多いのも、フランスの場合、「x x x x年にパリからストラスブールへ赴いた商人の旅行記を書け」、というのとそっくりである。全体が拮めており、人びとの日常生活が、1日、1年、一生と各レベルで眼前に展開できるようになることから始める、というのが私のいう歴史への接近の第一歩である。日本の歴史学はドイツからの影響が強く、理論から入る傾向が強い。私の場合、日本常民文化研究所で薫陶を受けた宮本常一氏の影響からか、Why? How? よりも What? が先に来る。時としてはそれだけで終わってしまうことすらある。多分、歴史の研究は、両方から掘り進めて行って、うまく行けば貫通する、というものなのだろう。

主要刊行文献（年代順）

- ① 日本における経済社会の展開 慶應通信. 昭和48年.



Keio University
1858
CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



- ② 近世農村の歴史人口学的研究 東洋経済新報社. 昭和48年.
- ③ 数量経済史入門 (共著) 日本評論社. 昭和50年.
- ④ 江戸の農民生活史 NHK ブックス. 昭和63年.
- ⑤ 近世濃尾地方の人口・経済・社会 創文社. 平成4年.
- ⑥ The Historical Demography of Pre-modern Japan. Tokyo University Press. 2001.
- ⑦ 歴史人口学で見た日本 文春新書. 平成13年.
- ⑧ 江戸農民の暮らしと人生 麗澤大学出版会 平成14年.
- ⑨ 近世日本の経済社会 麗澤大学出版会 平成15年.
- ⑩ 大正デモグラフィ 文春新書. 平成16年.
- ⑪ (編著) 歴史人口学と家族史. 藤原書店. 平成16年.
- ⑫ (共編) Emergence of Economic Society in Japan : 1600-1859. Oxford University Press. 2004.
- ⑬ 日本を襲ったスペイン・インフルエンザ 藤原書店. 平成18年.